池田　誠一

【7】近代２（明治後半）…⑪上絵付産業 ⑫覚王殿誘致

1 明治の名古屋

名古屋は明治22年に市制を施行しました。直後の24年には濃尾地震があって出鼻をくじかれましたが、その後はまさにＶ字回復を遂げ、大きく成長することになりました。その要因は、まず、22年の東海道線の全通でしょうか。人や物の流動が始まり、それが産業に火をつけたようです。

名古屋の近代産業の原点は、陶器と木材、繊維等です。なかでもいち早く全国トップレベルに成長したのは陶磁器でした。瀬戸や東濃での磁器産業は上絵付けの時代で、名古屋はその輸送基地に、さらには生産拠点になっていったのです。そして我が国初期の花形の輸出産業になりました。

その明治後半、成長した名古屋の力を、全国に示すような出来事がありました。釈迦の真骨の誘致です。その安置場所をめぐって、全国の誘致合戦が始まったのです。とりわけ京都は強力でしたが、なんと名古屋は争って勝ち取ったのです。

明治・年	事　　項	備　考
22	名古屋区、市制を施行	
22	東海道線全通	駅開業は 19 年
29	**森村組、大規模工場建設**	**全国の絵付職人集約**
31	路面電車開業	全国で２番目
37	**覚王山日蓮寺開創**	**唯一の釈迦真骨安置**
40	熱田町合併・名古屋港開港	道路・電車も開通
41	第八高等学校開校	愛知郡内に設置
43	関西府県連合共進会	263 万人入場

図１　明治時代後半の名古屋の出来事。
今回は、太字の２つを主に取り上げた

今回は、このように力をつけ始めた名古屋の明治後半の二つの事例等から、近代の誇りうる点を考えてみます（図１）。

2 都市の力

(1)上絵付産業：世界に輸出された焼物

江戸時代後半に発達した磁器は、明治になって白地の磁器の上に絵を描く、上絵付が盛んになりました。産地は、有田、京都、九谷に、瀬戸・東濃等です。

ところが輸出が盛んになると、効率化が必要になります。その主要企業であった森村組

（現在の森村グループの祖）は、明治29年、京都、九谷等の優秀な絵付職人を名古屋に集約させたのです。東区の白壁地区には絵付職人が千人という大工場が出現しました。

名古屋が選ばれたのは理由がありました。近くの瀬戸、東濃では焼物業が盛んで、名古屋はその基地に好都合でした。上絵付けの作業は輸送拠点に近い所が有利で、産地で白地に焼いたものを交通の便の良い所に運び、手間のかかる上絵を付けたのです。白壁地区は、瀬戸と東濃からの街道の合流点です。付近は中級武士の屋敷だったため広く、工場に適当な土地の確保が容易でもありました（図２）。そして名古屋は、絵付け産業の拠点になっていったのです。製品は、大半が欧米に輸出され、名古屋港のみならず、我が国の戦前の有力な輸出商品になっていきました。

森村組は37年には名古屋駅近くの則武に新工場を建て、日本陶器合名株式会社となり、ブランド名も地名からとった「ノリタケ」としました。その戦前の製品は、今日では「オールドノリタケ」と呼ばれます。その高い技術によって、現在でもアメリカでは本が出版され、コレクタークラブが活動するような美術品として珍重されています。

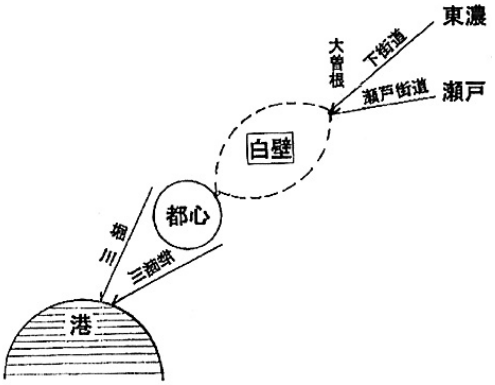

図２　名古屋付近の陶磁器の動き。
瀬戸・東濃から白壁地区で絵付けをして港へ

年	１位	２位	３位	備　考
明治 40	車両等 100.0	陶磁器　0.0	時計類　0.2	10月開港
昭和　8	綿織物　8.6	**陶磁器　86.2**	小麦粉　6.6	
12	**陶磁器　79.5**	綿織物　7.0	毛織物　12.2	**陶磁器最盛期**
18	**陶磁器　32.4**	機関車　18.5	綿織物　2.7	太平洋戦争中
28	**陶磁器　93.4**	繊維機　37.0	ミシン　25.6	
38	**陶磁器　92.8**	自動車　38.7	鉄　鋼　4.8	

図３　名古屋港における輸出上位３品目とその全国シェア―。
陶磁器がトップ

昭和の初め、我が国の陶磁器業界の拠点として、東区の赤塚に陶磁器会館が作られました。そして銀行ができ、商社が集まりました。昭和時代、この地方でつくられる陶磁器は、我国陶磁器輸出額の８割を占めていたのです（図３）。

(2)覚王殿誘致：釈迦の真骨

明治31年、インド北部で発掘された遺跡は、古代文字の解読によって釈迦の墓であることが分かりました。その遺骨は、仏教国シャム（現在はタイ）に寄贈され、日本もその分骨を受けることになりました。しかし、問題は国内の安置場所でした。釈迦を意味する「覚王」から、覚王殿と名付けられたその安置場所をめぐって、全国から手が挙がったのです。

名古屋は、名古屋区長だった吉田禄在を中心に宗・官・民が一体となり、論理の構築、用地の取得、資金の確保等を進めました。場所は仏縁のあることに加えて、10万坪の広さが求められていました。また資金は、誘致費用として当面50万円を用意する必要がありました（寺の建設には1,000万円です）。

そこで名古屋は、まず場所として市街東方の丘陵地を選びました。南北に尾張四観音の巡礼道が通り、東西に斎場へのほうろく道が通る仏縁の地です（図４）。その一帯、10万

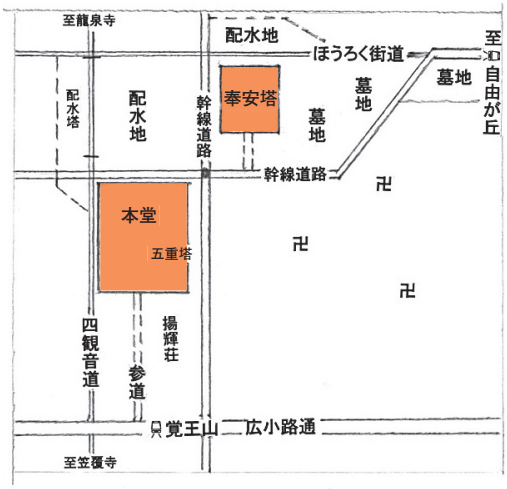

図４　日泰寺付近の概要図。
10万坪を越す土地は、今日では４万坪程という

坪余を、地元の加藤慶二旧村長が取得して寄付しました。資金も、仏教に熱心な名古屋の財界を中心に確保されました。

安置場所の決定の最後の段階は、京都との一騎打ちになりました。保留を主張する京都派委員が退場する中、名古屋は全国の支持を得て、なんと37：1の大差で、誘致を勝ち取ることができたのです。

明治37年、名古屋市の東の丘陵地に、覚王山日暹寺（にっせんじ。シャムは「暹羅」）が開創されました。寺の本尊は、シャム国王から贈られた、千年昔のものという国宝の釈迦如来像です。そして寺は、どの宗派にも属せず、全宗派が輪番で住職を務めるという前例のない寺になりました。

図５　伊東忠太の設計したガンダーラ調の奉安塔
（日泰寺ＨＰ）

開創すると全国から多数の参拝者があり、明治末には千種駅から参道の月見坂まで、電車も走り出しました。そして釈迦の真骨は、大正７年、我が国を代表する建築家・伊東忠太設計の奉安塔の中に納められ、封印されたのです（図５）。

今日では、国名がシャムからタイへと変わり、覚王山日泰寺となりましたが、名古屋市民も、わが国唯一の釈迦の真骨を祀る寺院として、誇りを持ってアピールする必要があります。

(3)その他

＜関西府県連合共進会＞

明治の末、愛知県は、第10回の関西府県連合共進会を誘致しました。当時は、国が行なう総合的な内国勧業博覧会（以降、内国博）と、地方が行なう部門ごとの共進会という二つの博覧会に分かれていました。名古屋は内国博を誘致したかったようですが実現せず、31府県が参加する関西府県連合の第10回共進会を誘致することになりました。

その頃の名古屋は、知事・深野一三、市長・加藤重三郎、商業会議所・奥田正香と、各大物が揃っており、三角同盟と呼ばれる緊密な関係にありました。三者は、そろって名古屋を売り出すべく足並みをそろえたのです。

会場は、市が確保した公園用地、今の鶴舞公園と名大病院を合わせた30ha。会期は、明治43年の３月から６月の90日間でした。

その結果は大成功に終わりました。会期

中に訪れた人は、263万人を数えたのです。この数字は、国が行った５回の内国博のうち、会期の関係もあって最後の大阪博には及びませんでしたが、堂々と国主催の博覧会と並ぶものになったのです（図６）。明治の最後のころの名古屋は、東京、大阪と競い合うことのできる都市へと成長していたのかもしれません。

＜国・内国勧業博＞

回	明治（年）	都市・会場	会場（ha）	会期（日）	入場者（万人）	備考
1	10	東京・上野公園	10	102	45	
2	14	東京・上野公園	14	122	82	
3	23	東京・上野公園	？	122	102	外国人客誘致
4	28	京都・岡崎公園	18	122	114	建都1100年
5	36	大坂・天王寺	36	153	435	外国製品も展示
6	40	？	―	―	―	万国博？→中止
＜名古屋・共進会＞						
＊	43	名古屋・鶴舞公園	30	90	263	開府300年

図６　国主催の内国勧業博（全５回）と名古屋の共進会

3 紀行 覚王殿の地

… 釈迦の真骨が眠る丘陵 …

それでは、釈迦の真骨の安置された覚王山日泰寺付近を歩いてみます。戦後、幹線道路が本堂と奉安塔を分断してしまったため、今日では寺の全体が見えにくくなっているように思えます。

＜四観音道から＞

地下鉄覚王山駅の西改札を出て、エレベーターで地上に出ます。すぐ前を右手に行くやや広い道が、日泰寺の参道です。

ここでは、その道を通り過ぎて２本目を右に、細い斜めの道に入ります。この道が、寺の誘致の時に仏縁とされた尾張四観音の巡礼道です。南区の笠寺を出て北に、ここ日泰寺に沿って進み、先は守山区にある龍泉寺に向かっています。その雰囲気を味わったら、左手に大きな料亭を通り過ぎたあたりで、一本右の寺の参道に出ましょう。この参道は、毎月21日の弘法の日にはたくさんの人でにぎわいます。

日泰寺への参道。正面が山門

緩やかに上っていくと参道がカーブし、日泰寺の五重塔や山門が見えてきます。この辺

北へと続く尾張四観音巡礼道。
龍泉寺へと向かっている

山門からみる広々とした日泰寺境内。
右手の五重塔は近年できた

りの右手、１本向こうには、大正の頃に松坂屋の伊藤次郎左衛門祐民がつくった広大な別荘、揚輝荘があります。山門が近づくと、右手に地蔵堂と御詠歌堂があり、ここから山内の88カ所の巡礼道が始まります。さて、山門に入りましょう。

階段を上がり、大きな山門をくぐると開放的な広い境内です。正面が本堂で、右手前には近年できた五重塔があります。まっすぐ境内を進み、本堂にお参りします。ご本尊は、タイ国宝の釈迦の金銅仏です。本堂を出て見渡すと、境内の向こうに名古屋市街が広がります。

本堂のご本尊はタイ国宝の金銅の釈迦如来立像

＜法六道へ＞

さて、釈迦の真骨が奉られている奉安塔に向かいましょう。左手、五重塔の手前に、左

近年、奉安塔への入り口が立派になり、
分かりやすくなった

に下る道があります。下った先は公道で、寺に沿って進むと、寺側には、88カ所巡礼のお堂が並びます。左に曲がって北に進むと、幹線道路に出るので右に、次の交差点を対角線方向に渡ると、奉安塔への入り口です。

参道を進みます。右側は墓地になっており、電力王の福沢桃介の顕影碑が目につきます。階段を上ると奉安塔の門があり、そこから中には進めません。ところがそこでは新しい拝殿が邪魔をして塔の足元しか見えないのです。残念です。

奉安塔の門から、内部を見る。
肝心の奉安塔は拝殿が邪魔して、足元だけ

見えない塔にお参りをし、バックして階段を降ります。下の道を左にまわると、ここから東は、ずーっと広大な墓地になっています。そして左手の奉安塔には囲いがあり、ここでも木々に囲まれて塔は見えません。そのまま囲いに沿って北に進むと、やや坂を上って道路に出ます。この道が、ほうろく道です。

明治30年、この東の上野の地に、吹上から火葬場が移ってきました。そのため、市内で葬儀をした後、参列者が「南無阿弥陀仏」を唱えつつ、この道を歩いたといいます。これが６文字で「ほうろく（法六）」道となったようです。

東に、墓地に沿って進みます。少し行って振り返ると、オッ。先ほど見えなかった奉

ほうろく街道の途中で振り返ると、木々の間に奉安塔が見えた

安塔の上部が木々の間から見えるのです。

街道を行くと、やはり左手には点々と88カ所のお堂が並びます。しばらく行って、先ほど渡った幹線道路に出るので、その歩道を進みます。やはり右側は日泰寺の墓地が続きます。少し行った左手に葬儀場や墓地があります。この辺りに上野の火葬場がありました。

街道は、左に88カ所巡礼のお堂、右に墓地の塀。その間を進む

そのまま塀に沿って進み、墓地が切れる所で右に曲がると、その先の墓地の入口に、88カ所巡礼の打ち止め、高野山があります。南の２本目を左に曲がると、眼下に地下鉄の自由が丘駅が見えます。

4 競争の時代

江戸時代の名古屋は、江戸、大坂、京都という３都の後に続く諸藩、石高でいえば、金沢（120万石）、鹿児島（73万石）、仙台（62万石）の次の、我が国で７番目の都市でした。しかし、そんな中ではありましたが、明治の名古屋はなんとか三都に追いつこうという気力がありました。もちろんそれは自力で獲得しなければならないものでした。

幸い、資源がありました。国土の中央、とりわけ東京と大阪の中間にあるという立地。そして、豊かな濃尾平野と木曽三川です。そこに鉄道を誘致し、港湾を開きました。次は産業でしたが、瀬戸・東濃の陶磁器を集約する場所から、鉄道や港湾を活かし、生産・輸出する場所へと変えていきました。そして人材も育ちました。釈迦真骨誘致や共進会開催は、人材のネットワークの勝利だったといえます。

明治時代は、安定の江戸時代ではなく、競争の時代でした。しかし、それがかえって良かったのかもしれません。名古屋は、その中で資源や人材を活かして、三都を懸命に追いかけたのです。

〈主な参考文献〉

①井元啓太編『名古屋陶業の百年』
（1987、㈶名古屋陶磁器会館）
②寺沢玄宗『釈尊御遺影伝来史・覚王山日泰寺奉安塔の由来』
（1986、覚王山日泰寺）